

# 博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 16 号

2018（平成 30）年 4 月

聖心女子大学

## は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、2018（平成30）年2月19日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

## 目 次

|         |  |      |
|---------|--|------|
| 氏 名     | 西川 蘭 (にしかわ らん) .....   | 23 頁 |
| 学位の種類   | 博士 (文学)  |      |
| 学位記の番号  | 甲第 36 号  |      |
| 学位授与年月日 | 2018 (平成 30) 年 2 月 19 日  |      |
| 学位授与の条件 | 聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当   |      |
| 審査研究科   | 聖心女子大学大学院文学研究科   |      |
| 論文題目    | 江戸川乱歩『パノラマ島綺譚』論<br>—— 〈消極的社会運動〉としてのエロ・グロ・ナンセンスに見る乱歩<br>の〈新しさ〉 —— |      |

|         |   |
|---------|---|
| 氏 名     | 西川 蘭 (にしかわ らん)  |
| 学位の種類   | 博士 (文学)   |
| 学位記の番号  | 甲第 36 号   |
| 学位授与年月日 | 2018 (平成 30) 年 2 月 19 日                                     |
| 学位授与の条件 | 聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当                                      |
| 審査研究科   | 聖心女子大学大学院文学研究科  |
| 論文題目    | 江戸川乱歩『パノラマ島綺譚』論<br>—— 〈消極的社会運動〉としてのエロ・グロ・ナンセンスに見る乱歩の〈新しさ〉—— |
| 論文審査委員  | (主査) 教授 川津 誠<br>(副査) 教授 大塚 美保<br>(副査) 教授 木下 ひさし (本学教育学科)    |



## 博士学位論文の要旨

本稿は、昭和のエロ・グロ・ナンセンス時代を代表する作家として広く知られている江戸川乱歩の『パノラマ島綺譚』について論じたものである。まず、昭和のエロ・グロ・ナンセンスが一過性の〈出所不明の集団ヒステリー〉的な流行として捉えられる反面、プロレタリア文学運動のような〈積極的社会運動〉に対する〈消極的社会運動〉であることに着目した。これにより、従来のエロ・グロ・ナンセンス観をもとに認識されてきた乱歩作品とは異なる、より社会的な意味を持つものとしてのエロ・グロ・ナンセンス性を乱歩作品に見出すことができると考えた。

これを踏まえ、『パノラマ島綺譚』における社会性——〈消極的社会運動〉としてのエロ・グロ・ナンセンス——を考察した。論文の構成は以下の通りである。

第一章では『パノラマ島綺譚』の乱歩自作解説、同時代評、先行研究等を振り返った。自作解説に加え、ここでは改めて乱歩のエロ・グロ・ナンセンスに対する忌避的態度や同時代評、先行研究を振り返ることによって、これまでの『パノラマ島綺譚』論における読みの方向性を確認していった。

本章では、近年、乱歩作品の社会性が見直されようとしている点に着目した。ここでは、その一例として「芋虫」(『新青年』昭和四(一九二九)年一月)を取り上げた。昭和十四(一九三九)年に発禁処分を受けた『芋虫』は、これを〈反戦小説に他ならない〉と読んだ当時の左翼系読者と、〈反戦小説ではない〉とした乱歩の執筆意図に隔たりがあると乱歩が明言した作品である。発禁処分を受けたという面でも、テキストそのものが作者の意図に反して左翼的なイデオロギーに基づいて読まれた面でも、『芋虫』は乱歩作品の中で顕著に社会的な要素を持っていることを指摘した。

これを踏まえ、次章より『パノラマ島綺譚』における〈消極的社会運動〉としての〈エロ〉論、〈グロ〉論、〈ナンセンス〉論を、それぞれ一章ごとに論じた。

第二章ではエロ・グロ・ナンセンスの三つの柱の内の〈エロ〉について、『パノラマ島綺譚』における裸体観に着目して考察した。パノラマ島の裸女たちに対する〈まなざし〉と、千代子に対する〈まなざし〉の差異を取り上げ、近代絵画・女優論等における目まぐるしい裸体観の変遷を追う。裸体を見る・鑑賞する上で形作られていった〈視覚のイデオロギー〉が『パノラマ島綺譚』においてどのように作用しているかを詳らかにし、後に立ち上る〈触覚〉がいかように〈視覚のイデオロギー〉を転覆させ得るかを論じた。これによって、『パノラマ島綺譚』における裸体観が同時代のそれを覆すラディカルな感性によるものであることを明らかにした。

第三章では、エロ・グロ・ナンセンス二本目の柱として〈グロ〉について論じた。ここでは、菰田のグロテスクな腐乱死体と対面した人見が、〈精神病者〉として〈犯罪者〉となっていく過程に着目した。さらに、当時の精神病言説が精神病者を犯罪者予備軍として囲い込もうとしていった〈権力のグロテスク〉も指摘する。それらの言説と照らし合わせ、『パノラマ島綺譚』が当時の差別的な精神病言説を汲み取っている点を指摘した。

一方で人見が「天才」と称される点に注目し、着眼点の変換によって精神病者観が反転することを指摘した。『パノラマ島綺譚』における精神病描写は、社会(行政、司法、〈常識〉)

を盾にする世間の人々など、権力を持つ集団、マジョリティー)によって理想化された常識や価値観を排して新たに物事を評価するまなざしを与えることを明らかにした。

第四章では最後に〈ナンセンス〉について論じた。大正末期から昭和初期にかけ、乱歩の古巣でもある雑誌『新青年』は、時代に先駆けてナンセンス文学を盛んに取り入れ始めていた。そのナンセンス化の最中に『新青年』で連載されていたのが『パノラマ島綺譚』であった。

まずナンセンスが、人々が疑問の余地なく受け容れている言説・常識・秩序・合理性などといった観念を悉く嘲笑う、社会的な風刺に満ちた文学として捉えられていた点を指摘した。次にナンセンス文学と乱歩との関わりを明らかにし、最後に『パノラマ島綺譚』におけるナンセンス的な表現を指摘した。これにより、『パノラマ島綺譚』がまるで当時の日本国そのものの行末を問いかけるような風刺に満ちていることを示した。

以上三章を通じて、〈消極的社会運動〉としてのエロ・グロ・ナンセンスと『パノラマ島綺譚』の相関を論じた。終章では、ここまでの論をまとめ、今後の乱歩研究における展望を示した。

このように、『パノラマ島綺譚』を〈消極的社会運動〉としてのエロ・グロ・ナンセンスによって捉えなおすと、社会性という物語の新たな側面が見えてくる。これまで社会性とは明確に関連付けられてこなかった〈乱歩性〉であるが、これによって、〈既成の絶対的な価値観や社会通念を次々と転倒させる力をもった作品〉として『パノラマ島綺譚』を評価することができると思う。

エロ・グロ・ナンセンスとは、現代の立場から大正末期・昭和初期といったごく短い時代を見つめなおしたときに改めて冠された時代の呼び名である。それゆえに、乱歩作品をエロ・グロ・ナンセンスを代表するものとするのは、期せず乱歩作品をその短い時代に閉じ込めてしまうことになる。しかし、このエロ・グロ・ナンセンスは〈昭和初期〉や〈一九二〇年代〉といったように区切られた時代そのものを直接的に示す言葉ではなかった。エロ・グロ・ナンセンスとは、時々の人々によって形作られた〈時代の空気・気分〉を指しているのだ。もしその〈時代の空気・気分〉が繰り返されるもの、あるいは受け継がれるものであるならば、エロ・グロ・ナンセンスはなにもその短い時代にのみ存在するものではないはずだ。

乱歩はエロ・グロ・ナンセンス時代を代表する作家とされながらも時代に反発し、背を向けていった人物である。そのような乱歩の作品が今日改めてエロ・グロ・ナンセンスとして見直されようとしている点に着目し、乱歩作品に漂うエロ・グロ・ナンセンスとは何であったかを明らかにする。

## Abstract

In this paper we will describe “The Story of Panorama Island” of Edogawa Ranpo known as a masterpiece representing the “ERO,GURO and NONSENSE” period of Showa. First of all, while the Showa ERO,GURO and NONSENSE is regarded as a transient fashion that can be described as <collective hysteria with unknown origin>, we have noticed Edogawa Ranpo masterpieces to be rather <passive social movement> against the <active social movement> as it can be seen in the proletarian literature movement. Due to this we could explore ERO,GURO and NONSENSE nature as something having more social meaning in different from other Ranpo masterpieces considered through its conventional ERO,GURO and NONSENSE view.

Basing on this, we examined the social nature of “The Story of Panorama Island” and ‘ERO,GURO and NONSENSE’ as a ‘passive social movement’. This paper is composed in a following way.

In the first chapter, we looked back on the self-commentary on the “The Story of Panorama Island”, the contemporary review, the previous research, etc. In addition to self-commentary, here we again recognized the direction of reading from the previous “The Story of Panorama Island” papers by looking back on the evasive attitude towards ERO,GURO and NONSENSE of Edogawa Ranpo, its contemporary criticism and previous researches. In addition, in this chapter, we focused on the fact that sociality of Edogawa Ranpo works is being reconsidered in recent research regarding his masterpieces. Based on this, we discussed each of the chapters on the “ERO”, “GURO” and “NONSENSE” theories respectively as a “passive social movement” in the “The Story of Panorama Island” from the next chapter.

As for “ERO” aspect, in second chapter, we focused on the description of naked body in “The Story of Panorama Island” among the three pillars of ERO,GURO and NONSENSE. We took up the difference between “looking” at naked women on Panorama Island and “looking” at Chiyoko, and chasing the transition of an bewildering nudity view in modern painting and actress theory. We have described in details how “visual ideology” shaped in seeing and appreciating the nudity acts in “panoramic island beauty” was used and how the <tactile sense> coming after could overturn the visual ideology. This revealed that the view of nudity in “The Story of Panorama Island” arises from the radical sensibility overturning it in the same era.

In the third chapter, we described <GURO> aspect of as the second pillar ERO,GURO and NONSENSE. Here, we focused on the process by which a human face confronting



Komota grotesque rotting corpse became a <criminal> by turning into <psychopath>. Furthermore, also we pointed out the <grotesque of power> encloses the mentally ill as a criminal reserve army as a psychopathic discourse of that time. In light of those discourses, we pointed out that “The Story of Panorama Island” is compassing a discriminatory psychosis discourse at the time.

On the other hand, paying attention to the point that Hitomi is referred to as “genius”, he pointed out that the viewpoint of psychosis is reversed by conversion of the point of view. The depiction of psychosis in “The Story of Panorama Island” excludes common sense and values idealized by society (administrative, judicial, people of the world who have the common sense, peoples with power, majority) and gives a new look at the evaluation of the things around.

In the fourth chapter finally we described <NONSENSE> aspect. From the late Taisho period to the early Showa period, the magazine “ SHINNSEINENN ” which is also the old-fashioned Ranpo, began to actively introduce nonsense literature ahead of time. In the process of making that nonsense, “The Story of Panorama Island” was serialized in “ SHINNSEINENN ”.

First of all, NONSENSE pointed out that it was treated as a literature full of social satire, that ridiculed every idea such as discourse, common sense, order and rationality that people accept without any doubt. Next, we revealed the relationship between nonsense literature and Ranpo and finally pointed out nonsense expression in “The Story of Panorama Island”. By doing this, “The Story of Panorama Island” showed that it was full of satire as if it was asking about end of the line of Japan itself at that time.

Through the above three chapters, we discussed the correlation between ERO,GURO and NONSENSE as “passive social movement” and “The Story of Panorama Island”. In the final chapter, we summarized all the theses so far and presented the further prospects for the research of Edogawa Ranpo in the future.

In this way, when you recapture “The Story of Panorama Island” as a “passive social movement” by ERO,GURO and NONSENSE, a new aspect of the story of sociality comes into view. It is <Ranpo style> which has not been clearly related to social nature so far, but could evaluate “The Story of Panorama Island” as a “masterpiece that has the ability to overturn rooted absolute values and social thoughts one after another”.

## 学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 西川 蘭

論文題目 江戸川乱歩『パノラマ島綺譚』論  
——〈消極的社会運動〉としてのエロ・グロ・ナンセンスに見る乱歩の  
〈新しさ〉——

審査委員 主査：川津 誠

副査：大塚 美保

副査：木下 ひさし（本学教育学科 専任教員）

### 1. 論文の要旨

本論文は、「序章」「第1章 はじめに——問題の出発点と論の方向性について」「第二章 〈エロ〉——ポルノとアート——」「第三章 〈グロ〉——精神病言説と犯罪・天才——」「第四章 〈ナンセンス〉——馬鹿馬鹿しさと社会風刺——」「終章」という章立てで、『パノラマ島綺譚』を中心的な考察対象としつつ、江戸川乱歩の評価に新たな視座を打ち立てようとするものである。

序章、第1章で、先行研究に見られる、昭和初年代を「エロ・グロ・ナンセンスの時代」と定義し、その代表的作家として江戸川乱歩を捉える従来の視点に対して、著者は、乱歩作品にプロレタリア文学との類縁性を見出す近年の新しい研究動向を紹介しつつ、「エロ・グロ・ナンセンス」という時代風潮を再検討し、乱歩文学のプロレタリア文学との類縁性を〈消極的社会運動〉という用語によって定義づけた。プロレタリア文学が現実社会の告発と改革をめざす〈積極的〉な社会運動であるのに対し、乱歩文学は同時代の社会と政治に徹底的に背を向ける（つまり徹底して〈消極的〉である）ことによって、逆説的に既成制度を批評し、価値の転覆をもたらす。そのような形でプロレタリア文学に通ずる〈社会性〉を持つ、という意味が〈消極的社会運動〉にこめられている。以下の三つの章で、〈エロ〉〈グロ〉〈ナンセンス〉をそれぞれ論証していった。

まず第二章では〈エロ〉を取り上げた。女性の肉体、裸像に向けられる視線の、明治期の裸体画論争に始まり、昭和初年に至る変遷を追い、そこに〈芸術性〉と〈ポルノ性〉の二分法を見出す著者は、『パノラマ島綺譚』もまた、〈芸術的〉に鑑賞される島の裸女たちと、主人公人見によって〈ポルノ的〉にまなざされる妻千代子、という視線の二分法を踏襲していることを指摘する。だが、この〈視覚〉に基づく二分法は、作中において、肉体的接触という〈触覚〉の介入により解体されていく。すなわち、裸体の芸術性とポルノ性との区分が容易に曖昧になり、反転しさえもすることが暴かれている。それはつまり、社会が持っている〈女性の裸体を芸術とポルノに二分する規範〉が脆弱であることを示すものであり、『パノラマ島綺譚』における〈エロ〉の描き方が、裸体芸術をめぐる支配的言説を疑い、社会規範を揺るがす事という意味で〈消極的社会運動〉性を持つ、といえるのである。

第三章では〈グロ〉を取り上げた。ここで著者は主人公人見の千代子殺害や墓場から薦田の死体を掘り出すといった、いかにもグロテスクな猟奇的場面を問題にするのではなく、人見に与えられた「神経衰弱」という、当時一種の精神病と見なされた病質に着目する。

精神病をめぐる同時代言説に〈グロテスク性〉を見出す著者は、「精神病患者は犯罪者になりやすい」という社会認識が当時存在したことを同時代文献の調査によって示すとともに、『パノラマ島綺譚』の人見の人物造形にもその認識が反映されていると述べる。一方で、芸術家の間にはロンブローゾの天才論に基づく「天才すなわち精神病」説が浸透していたことも調査によって示し、作中の人見がパノラマ島を作り上げるという事業において示した天才性が、殺害される妻や、人見の犯罪を暴く探偵によっても認識されていることから、人見の病質と天才性が不可分のものであることを示した。そのことによって、『パノラマ島綺譚』の精神病患者としての人見の描き方が、犯罪者性と天才性の双方を備えた両価的なものであり、同時代社会に優勢だった〈社会から排除されるべき〉〈グロ〉としての精神病患者イメージが容易に反転されうる、脆弱な観念に過ぎないと明示している事を明らかにした。

第四章では、以上の〈エロ〉〈グロ〉を合わせたとほぼ同じ分量を費やして〈ナンセンス〉を論じた。単なる〈無意味で滑稽〉といった表面的な意味で捉えられてきた〈ナンセンス〉が、それ以上の意義を持つことを示すとともに、乱歩本人はナンセンス文学に否定的であったとする従来の定説を覆し、乱歩作品の中にナンセンス文学の要素を指摘し、評価した。著者はこの章で当時のいわゆる〈ナンセンス文学〉の実作や評論を博捜し、また、乱歩の主たる発表媒体でもあった雑誌「新青年」や、『蜘蛛男』などの乱歩作品の解説を通して、〈ナンセンス〉を一般常識、既成概念を破壊し、既存の権威を否定するものとして、積極的・肯定的に定義し直した。『パノラマ島綺譚』の中にもその〈ナンセンス性〉は様々に看取される。「芸術」的であるはずのパノラマ島の中の「おもちゃのような驢馬」の持つユーモラスな様子、花火で打ち上げられ自爆する人見の自殺方法の非現実性。島の動力である機械に付与される「無意味」というレッテル。パノラマ島を、人見を王とする「国」に擬えることで見えてくる、同時代の日本社会をパロディ化した政治的無意味さ。こういった描写のもつ〈ナンセンス性〉に加えて、一つの方向性に収斂させ解決策を与えようとはしない、人見の死によって存在そのものが忘れられてゆくパノラマ島の描き方そのものの中に、社会の問題を皮肉めいた視線で描き出し、その先を読者に委ねる、何も主張しないという〈ナンセンス性〉を指摘する。その先の「社会運動は唯読者に委ねられるばかり」であることが、〈消極的社会運動〉に他ならないのである。

このように〈エロ〉〈グロ〉〈ナンセンス〉を論じてきた著者は、終章で、『パノラマ島綺譚』の持つエロ・グロ・ナンセンス性が、冒頭に述べたような意味での〈消極的社会運動〉に他ならないことを確認しながら、乱歩の時代の〈エロ・グロ・ナンセンス〉が孕んでいた社会性、問題系が現代においても解決済みではなく、今日に通じるものであることを指摘する。そして、乱歩の文学が今日、サブカルチャーを始めとする様々な創作の現場で引用・翻案され、見直されつつあることの遠因をそこに見、今後の乱歩研究の可能性を指摘して論は閉じられる。

## 2. 本論文の評価

江戸川乱歩の『パノラマ島綺譚』を、作品発表時の社会状況に置き直して、資料を駆使した文化的考察を深め、過去の作品としてではなく、現在も読まれているという事実を踏まえて再評価を試みたもの、と言える本論文においては、「エロ・グロ・ナンセンス」という、昭和初期の時代風潮を示す自明の用語とされてきた概念に疑義を呈し、新たな意味を

付与したことがまず評価される。

とくに〈ナンセンス〉に関しては、無意味で滑稽、ばかばかしいといった、あまり深く考えられてこなかった従来の表面的な解釈に対して、同時期に翻訳発表された海外作品や日本人作家のナンセンス文学と言われる実作を丁寧に調査し、当時のナンセンス文学の実態を解明する成果を上げており、今後の研究の一つの指標になるものと言える。

「エロ・グロ・ナンセンス」という、安易に一括りにされて時代性と結びつけられ、十分考えられてこなかった用語について、それぞれを個別に精査し、〈社会運動〉に繋がる道筋を付けたことにより、それが乱歩文学に冠せられる用語というのみならず、政治的・文学的プロレタリア運動との共通項をはっきりと有した、より広く社会とつながる、時代を示す用語であることを明らかにした。それは、現代文化を相対化しようという試みでもあり、文学研究の範囲にとどまらない成果と言える。

時代における文学のあり方を問うなら、周縁的な広がりを見ると同時に、作品に立ち戻った精緻な読みが必要であり、その点に物足りなさが残る。また、終章で示されたサブカルチャーと乱歩の結びつきの可能性については、文学作品が作者の存在をこえて新しい意味を時代と共に得ていくことを実証しようとしたものであり、新しい読者論へ開かれていく可能性もあるが、カルチャーという用語の厳密な定義を含め、過去および今日の時代認識の精査、現代文化論への目配りなど、さらにクリアすべき問題も少なくない。しかし、それらは今後の課題として、次の展開が楽しみな論文である。

### 3. 本論文の審査の過程

論文提出日 2017年（平成29年）10月30日。

学長からの付託日 2017年（平成29年）11月2日。

審査委員会設置日 2017年（平成29年）11月14日。

12月1日審査委員会

3名の審査員の論文への感想、問題点、評価点を示し合い、総合的な評価を行った。合格の可能性の高い論文として、次に執筆者本人の口頭試問に進むことを確認した。

1月10日口頭審査会

3名の審査員が、執筆者に対して論文の内容、研究姿勢、今後の研究方針に関して口頭試問を行った。執筆者は論文の内容のみならず、今後の研究の見通しについての質問にも明確に答えていた。それらを含め、質問に対する解答内容の妥当性などを判定し、次の公開審査に進むことを確認した。

1月24日公開審査会

聖心女子大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程の教員、学生を含め、20名ほどの出席を得て、公開審査を行い、論文についてのプレゼンテーション力、質問への解答などを総合的に審査した。これまでの審査過程で、本論文が文化研究を中心にするものであることに懸念を示す意見もあったが、この点については、執筆者の既発表論文に乱歩の『人間椅子』を精細に読解し論じた業績があり、作品研究の能力も問題ないことを確認した。

会の後、公開審査出席の人文学専攻教員による討議を行い、審査委員会の合格の判定を全員で確認、博士論文審査会に付議することとした。

博士学位論文  
内容の要旨および審査結果の要旨  
第16号

2018（平成30）年4月26日発行

発行 聖心女子大学大学院  
編集 聖心女子大学大学院  
〒150-8938  
東京都渋谷区広尾4-3-1  
電話 03-3407-5811（代表）